我が家の酪農経営について考える

北海道名寄産業高等学校

酪農科学科3年 植村 颯太

昨今、飼料価格の高騰により、多くの酪農家が経営不振に陥るなど、酪農危機への不安が高まっています。私は酪農の後継者として、酪農危機を乗り越えるために何ができるのか考えました。

酪農危機の背景には、ウクライナ情勢に伴う穀物価格の上昇等による、配合飼料価格の上昇があります。ロシアによるウクライナ侵攻以降、穀物流通量が大幅に減少したことで、輸入価格も上昇しました。また、円安が急速に進んだことも、見過ごせない大きな要因でもあります。

農林水産省のデータによると、配合飼料の価格は2020年10月時点では1トンあたり約6万7千円だったのに対して、2023年時点では1トンあたり約10万円となり、2年間で約1.5倍となっています。飼料の7割以上を輸入に頼っている日本においては、飼料価格の高騰が酪農経営を圧迫することにつながります。国の配合飼料価格安定制度により、飼料価格が一部補てんされたものの、急激な値上がりに対応しきれず経営危機を訴える酪農家も少なくありません。

このような中、自宅における酪農経営の改善策と、酪農科学科で学んだことを踏まえた酪農経営の方策を考察し、酪農危機の先にある安定した経営を目指して、後継者として実践したいことを2点述べます。

一つ目の「自宅における酪農経営の改善策」についてです。

自宅では、6年前まで自家生産した飼料を中心に飼育していました。1頭当たりの1年間の乳量が約9.9トンに対し、飼料費が約50万円でした。昨年から濃厚飼料に変えたところ、令和5年の乳量は1.2倍の約10.8トンに対して、飼料費は1.5倍の約75万円となりました。

この飼料費の比較だけを聞くと、経営が厳しいと感じるかもしれません。実はこの5年間で全国的に生乳価格が上昇し、6年前は10kg当たり全国平均848円でしたが、昨年は、生乳価格が約1.4倍の1,135円となりました。

濃厚飼料に変えたことで、経営に大きな影響を与えましたが、乳量の増加と生乳価格の上昇により、酪農危機を乗り越えることができました。

父に「飼料費がこんなに増えているけど、経営は大丈夫なの？」と聞くと、「飼料費は高騰するが、生乳の品質や数量を上げることで、経営を改善させることができた。自家生産の飼料を中心であったら、経営が成り立たたらず、今ごろ離

農していたかもしれない。」とっていました。話を聞く中で私は、飼料を輸入に頼らなければならない現状を変えるために、自家生産した飼料の栄養価や品質向上など再検討することで、生乳量を向上させ、輸入に頼らない安定した酪農経営を目指したいと考えました。

二つ目の「酪農科学科で学んだことを踏まえた酪農経営」についてです。

2年生の秋、美瑛町の「ファームズ千代田」を視察しました。こちらの牛舎では、臭いによるストレスを軽減して和牛の肉質やジャージー牛の乳質をよくするため、発酵牛床を使用していました。牛は家畜の中でもとても神経質で、ストレスを感じればすぐ乳質や乳量に現れます。私は、牛をなるべくストレスのない環境で育てることで、乳質・乳量を改善するとともに、乳房炎などの治療費削減、さらには作業中の牛との事故も軽減し、牛にも人にも安心安全な経営ができるのではないかと考えました。

思考する中で、自分の考えは現実性のあるものかを確かめるため、地元の有識者に話を伺いました。そこで、ある酪農家の話を聞きくことができました。この牧場では、牛舎はホテルであり、牛はホテルに泊まりに来るお客さんであるという「牛ファースト」の考えをもって経営されていることを知りました。牛床はベッドのようにふかふかで、牛舎にいても一切臭いがかず、牛にも人にもストレスを与えない酪農をしていること、そして、乳質・乳量はトップクラスの成績であることを教えていただきました。最後に「これからは、基本に忠実な酪農家だけが生き残ることができる」とお話しいただきました。今まで私も、牛をストレスのない環境で育てることが大切であると考えていました。自分の考えていたことを実践することで、牛にも人にも安心安全な経営ができるということを、確信しました。

私は来年3月に酪農科学科を卒業し、酪農経営者となります。これまでの経験をとおして思考する中で、酪農危機を乗り越えるために大切なことは、「牛のコストパフォーマンスを高める」ことだと思いました。

コストパフォーマンスとは、費用対効果のこと。栄養価の高い飼料を与え、ストレスの少ない環境で『牛ファースト』の飼養管理を行い、飼料量に合った質の高い乳を安定して生産し、収益の増加につなげます。そのために、牛一頭一頭のデータを管理し、受精、分娩、搾乳期間、給餌量などを最適化します。

牛のことを第一に考え、牛の本領を発揮させるという酪農の基本に忠実な経営をする『コスパの良い酪農家』を目指します。